

多過ぎる犯人

三六〇円



昭和三十八年六月十五日印刷
昭和三十八年六月二十日発行

著作者 南條 範夫
発行者 角谷 奈良雄

発行所 株式会社東京文藝社
東京都新宿区払方町一
振替・東京二一七五七
電話・(三三)二五六〇

多過ぎる犯人

装帧
三井永一

目次

多過ぎる犯人	五
天国と地獄	三
暗黒への逃亡	九〇
あと味の悪い男	一七
偽装殺人	二六
怖ろしい女	一四
私が見た女	一六
瓦解	二〇三
新しい旅	二四
雪と運命と	二四〇
丘の上の白い館	二五

多過ぎる犯人

1

どちらも汚ならしい悪党だったに違いない。金と色との為に、人を——それも養父と主人に当る男を殺そうと決心したのだから。

しかし、この二つの要素は、二人の各々に於て異った比重を占めていた。

武藤満朗が養父の安太郎を殺害しようとした動機は、主として、金であった。

安太郎は六十を三つも越していながら、頑健そのもので、いつ死ぬものやら見当がつかなかった。うっかりすると三十歳の満朗の方が、先にいつてしまうのではないかと思われる程だったのだ。

そして、安太郎の生きている限り、財産は凡て全くその管理下におかれている。満朗は安サラリーマンとしての生活しか出来ないのである。

富裕な武藤家の養子になって、友人たちから羨望されているが、差当り何の余沢も受けていない。いつそれに浴する事が出来るか今の処、見当もつかない。

武藤家の養子になる為、満朗が、どんなにどれほどの苦心をしたかは、彼のみが知っている。

氣むずかしく、強慾な安太郎の氣に入る為に、泥靴の裏をなめるような卑屈な思いをしてきた。満朗の面が、同僚の蔭口によれば、泥靴の裏のようなど言われているのは、その為かも知れないのだ。もともと、余り見栄えのする面ではなかったのだが。

安太郎の独り娘の富子が、淫奔な性質で、何人もの男を経験していることも承知の上で、その愛情を求めたのも、勿論、武藤家の財産が目当である。

富子は、格別、満朗に惚れた訳ではない。

女のくせに一・七〇メートルもあるので、自分にふさわしい對手が容易にみつからず、誰でもいいと思うようになって、少しでも色氣を見せる若い男には、大抵身を任せたが、いざとなると、對手が逃げ出した。

多情と我儘とに、呆れ返ったからだ。

勿論、ただ一時の遊びならとに角、結婚してから、自分より五、六センチも背の高い女と、始終一緒に生活をする事を考えると憂鬱になった為でもあるだろう。

満朗に何のとり得がないとしても、少くも、背が高かった。

眼鏡の下から陰気な眼を、上眼づかいに光らしている泥靴の裏のような面は、気に喰わなかったが、背後からみれば、それも大して気にならない。

それに、結婚後、いくら浮気をしても、この男なら何も文句を言うまい。

そう考えて、満朗を養子に迎えることに同意したのだ。

満朗の方は、その面と同様、泥を塗りこくった様に汚ない腹の中に、別の魂胆をひそめていた。

何でも強引に富子と結婚してしまえばいい。富子が何をしようと、見逃がしてやろう。その代り、安太郎が死んで、全財産が自分のものになったら——その時こそ、思い知らせてやる。電信柱のような色気違いめ！

ところが、その安太郎が、容易に斃くたばりそうもないのだ。

忌々いまいましくなつて、ちよつと反逆した。

安太郎の妾いぐのの幾乃と、密通したのだ。

幾乃は二十三歳。

安太郎に比べれば、随分、若い。

それでも、安太郎は少し不満だった。

六十を越したら、男は、自分の年齢の三分の一以下の女が一番いいのだと信じ、それを公言していた。六十三歳なのだから、妾は、二十一歳以下でなければならぬ。

そんな事を言う安太郎を、幾乃は、憎悪した。

しつこいだけで、充分に満足もさせて呉れない、いやらしい爺だと思っている。

だが、二十三の今迄、幾乃が相手にしたのは、凡て、爺ばかりだった。

最初が七十一歳の好色隠居。

その頃まだ生きていた父の甚吉が、十六歳の幾乃を一万円で提供したのだ。

転々として、それ以後、妾の生活を続けている。どれも六十前後の禿頭か、白髪頭だった。

幾乃にとっては、満朗は、最初の若い男である。他人の目にとっては、貧相な、卑屈なノッポに過ぎなくても、彼女の眼には、特別に映ったに違いない。

多少、本気で惚れ込んだ。

満朗にしても、女に惚れられたのは初めてだから、悪い気はしなかった。

その上、二人を結び付ける共通のものがあつた。

安太郎に対する憎悪である。

「いやらしい爺、早くくたばってしまえばいいのに、顔を見るだけでも身震いする」

幾乃は、満朗の機嫌をとる積りで、いつもそう言った。

「おれがこの家を嗣いだら、富子を離縁して、幾乃と一緒に暮らしたいな」

満朗も幾乃の機嫌をとる為にそう言った。

「でも、あのお爺ちゃん、なかなか死なないわよ。あんなに丈夫なくせに、毎日、肝油だの、ビタミンとかだの、欠かさずのんで、八ツ目鰻やスッポンなんか、もりもり喰べてるんだもの」

「全く憎らしい位、よく喰うなあ」

二人が、言い合せたように、同じことを腹の中で考えた。

——早く死んでくれりゃいいのに。

何度も同じことを考えている中に、口に出すようになった。

こうした二人に於て、消極的な願望が、積極的な意図に変るには、大した日数はかからなかった。

「何とかして、分らないように、殺してしまう方法はないかな」

満朗が、やや冗談めかして言った時、幾乃は、真剣な顔で答えた。

「私も、それを考えていたのよ」

お互いに、対手が自分と同じ位の悪党であることに安心したような光が、双方の瞳の中を、きらっと薄気味悪く走った。

ここ迄話が進めば、あとは簡単だった。

熱心に、安太郎殺害の具体的方法を、検討し合った。

完全犯罪は、至難だ。

それは、推理小説を耽読している満朗にも、そんなものを読んだことのない幾乃にも、よく分っていた。

しかし、何とかして、誰にも分らぬように殺さなければならない。

それは、もはや、二人にとって、どうしても断行しなければならない至上命令のように考えられてきた。

「急に、ひと思いに殺してしまつては、危いな。徐々に弱らして、殺すのがいい」

「少しずつ、薬を飲ませたらどうかしら」

そんな薬が、容易にみつかりそうにもなかった。

幾乃が、不意に思いついた。

「私、聞いたことがある。白髪染の薬を、少しずつ飲ますと、段々弱つていつて、死んでしまうんだつて」

安太郎は、白髪を染めている。その事から、幾乃が憶い出したのだ。誰に、いつ、聞いたのかは、

覚えていない。

「白髮染の薬——ふうん」

満朗が下唇をつき出して、考えた。

「どんな味がするのか知らないが、飲む時に分りやしないかな」

「それがね、味噌汁の中に、少しずつ入れて飲ませれば、気がつかない位だって」
「やってみるか」

不可能ではなかった。

家族は、安太郎と、幾乃と、満朗と富子、女中のとくの五人である。

富子は外出し勝だし、家においても台所のことなど、全然やらない。

食事の支度は、幾乃がとくを差図して、やっているのだ。

安太郎は、いつも母屋とは別棟になっている離れに、独りでいる。夜は別だ。幾乃が一緒に寝る。
三度の食事は、幾乃が運んだ。

「気をつけて、極少量から始めるんだね」

「大丈夫、うまくやってみる」

白髮染の瓶なら、万一、発見されても、弁解はつく。

決心した翌朝、ほんの少し、安太郎の味噌汁の椀の中に入れてみた。
気がつかないらしい。

その代り、何の変った症状もなかった。

その翌日、もう少し、量をふやした。

その翌日、更に少し増量した。

三日目に、安太郎が、胃の具合が変だと言ひ出した。

満朗と幾乃とが、大袈裟に心配して、医者に診て貰えと勧めたが、安太郎は、

「なに、大丈夫だろう」

と、富山の売薬を一袋飲んだ。

自分のからだに對する自信と、売薬に對する信頼と、何となく医者に對して感ずる恐怖心とで、滅多に医者にかかった事はない。

医師と言うものが、病氣の治療者よりも、病氣の親類のような気がするのである。

それでも、十日ほど経つと、

「どうも、変だ、一遍、医者に診て貰うかな」と言ひ出した。

満朗と幾乃が、ちらと顔を見合せた。内心、ぎくりとしたのだ。

医者に診せた時、白髪染の薬を飲ませた事が暴露しはしないだろうか。

有難いことに、藪医者だったらしい。

「食べ物、悪かったのでしょうか。もうお年ですから、余り油っこいものは、少し避けた方がいいかも知れません」

売薬と大して違わない薬を調合して呉れただけである。

満朗と幾乃は、安心した。

二三日、休んで、又、白髪染の混入を再開した。

量は、かなり殖えていた。

安太郎は、何度か、胃の苦痛を訴え、

「こんな事はなかったんだが、おれも齡だな」

と殊勝らしい事を述べた。

胃の痛みに、慣れたような形になった。

苦しんでいる時に、誰か来客があると、やや誇張して、それを訴えた。

頑健無比と思われた安太郎の病気のことが、皆に知れ渡った。

「もう、大丈夫だ、いつ死んでも、持病が重くなつて——と思われるだろう」
思い切つて大量の白髪染を飲ませることに決めた前日、満朗が幾乃に言つた。

「ええ、でも、どの位で死ぬか、まだよく分らない。明日、失敗しても、いくらでも機会はあるから、余り無茶に入れないようにしましょう」

「でも、大量投入を余り度々繰返すと危い。一思いにやっちゃった方がいい」
相談して、量を決めた。

それが果して致死量であるかどうかについては、二人共自信がなかった。
安太郎は、それを飲んだ。

二時間ほどしてから、非常に苦しみ出した。とくを医者に走らせた。
医者も、さすがに少し首をひねつた。

「明朝、又来てみますが、余り苦しむようなら、報らせて下さい」
午後少し癒くなつたので、床の上に起きて来客に接した。

客は二人あつた。

先に来た客は、かなり永い間話していた。

その客のいる時、もう一人の客が来たので、最初の客は帰つていった。